

桑名の千羽鶴 連なる美 和紙1枚で折る技術、江戸時代の古文書から再現 大塚由良美

2016/10/20付 | 日本経済新聞 朝刊

1枚の和紙で、無数に連なった鶴を折る。三重県桑名市に伝わる「桑名の千羽鶴」の実物を見れば、感嘆されるに違いない。細かい鶴が一つながりになるさまは繊細かつ優美で、折り紙が工芸品のような芸術性を持つことが実感されるはずだ。

私がこの千羽鶴の技術の継承と普及に関わって、もう30年以上たつ。桑名市博物館で学芸員をしていたころに出会い、発想の豊かさと意匠の美しさに魅せられた。今は保存会の会長として、この郷土文化を守り伝える活動に携わっている。



地元の僧侶が考案

桑名の千羽鶴を考案したのは江戸時代にこの地にいた一人の僧侶である。長円寺の住職、魯縞（ろこう）庵義道（あんぎどう）（1762～1834年）。漢詩や俳諧をよくし、本草学者の木村蒹葭堂（けんかどう）や「都名所図会」の作者として知られる秋里（あきさと）籬島（りとう）らと交流。地誌や史書などをものした、当時の桑名きっての知識人・文化人である。

その義道が考案し、寛政9年（1797年）に刊行された「秘伝千羽鶴折形」という本がある。そこには1枚の紙を使って、2羽から98羽までの鶴を折る方法が記されている。のりや糸でつなぐのではなく、切り込みを入れた紙で連なった鶴を折り出すのである。全部で49種類ある折り方一つひとつに「昔男」「青海波」「夢の通ひ路」など風流な名前がつけられ、みやびやかなことこの上ない。

このような本の存在は知っていたが、まさか自分が折ることになるろうとは。きっかけは1983～84年の桑名市博物館の改修工事である。



5羽が連なる「迦陵頻」。難度の高い作品だ



その間、折しも三重県博物館協会の事業として、県内の各博物館が所蔵品を持ち寄って展示する企画が立ち上がった。だが改修中なので出品できるものがない。さてどうしようというときに思いついたのが千羽鶴だった。



49種類を試行錯誤

私は「秘伝千羽鶴折形」をひもといた。たしかに49種類の折り鶴が紹介されている。だが、折る手順の説明がない。この本に書かれているのは、紙の上に切れ込みの場所と折り線を示した図と、姿図（完成図）だけである。折り方は自分で考えなくてはならない。

ここはこんな感じだろうか、いや違うな。ではこうしたらどうか……そんな試行錯誤を重ねていくと、少しずつだが姿図どおりの鶴ができあがっていった。さしあたり20種類を作って展覧会に出展すると、思いがけず大きな反響があった。ならばと85年に博物館が再オープンした際、全種類を常設で見せることにした。

苦心して全部を作ったものの、私の中では気になることがあった。義道は49をはるかに超える数の折り方を考案していたようなのである。「折紙（おりがみ）にした鶴の姿態百品五百羽」を18年もの歳月をかけて考え出し、「素雲鶴」という書物にまとめた。だがその書物はどこにもない。義道の創意の神髄に触れたくても、それは歴史の闇の中に沈んでしまっていた。

だから2014年11月に長円寺の住職から「『素雲鶴』が寺の中から見つかった」という連絡を受けたときには、驚きを通り越して言葉も出なかった。押っ取り刀で長円寺にうかがい、「素雲鶴」を拝見した。

伊勢湾台風の被害で傷んでいたが、そこには未知の折り鶴の説明があった。これらもぜひ折ってみたいと思ったものの、「秘伝千羽鶴折形」と違い、姿図がない。図面だけで折ることは可能だが、本当にその形が正しいのかどうかはわからない。そこは今後の研究課題である。



作り方の本を発行

桑名の千羽鶴は76年に市の無形文化財に指定されているが、桑名で広く親しまれているわけではなかった。今では「広める会」も発足し、愛好家も徐々に増えてきている。作ってみたい人向けに「桑名の千羽鶴」（桑名の千羽鶴を広める会発行）という本も出した。

鶴の数が多いほど難しいわけではない。98羽を連ねる「百鶴」より、ここに写真を掲げた「迦陵頻（かりょうびん）」（5羽）のほうがずっと難度が高い。拙著では易しい順に並べているが、30番の「春の曙（あけぼの）」あたりからは指導を受けないと作れないかもしれない。

千羽鶴は桑名が世界に誇れる文化である。そしてこれほどの創意を発揮した義道という人物がいたことにも胸を張っていいと思う。未永くこの伝統と歴史を伝えていければと願っている。（おおつか・ゆらみ＝元桑名市博物館館長）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.